少しだけ「学問」にふれて

教養部部長　　綱沢　満昭

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。本学に入学されるまでには、いろいろな御苦労があったことと思います。それは皆さんだけでなく、御家族の人たち、学校の先生、いろいろな人が皆さんの入学にかかわってこられたことでしょう。そういう支援があって皆さんのこの入学という事実があるということを忘れないでほしいと思います。

さて、入学はしたが、これからどうしょう？。受験勉強が熾烈を極めれば極めるほど、大学へ入るまでがすべてで、入ってしまえばそれで終り、というような風潮がでてまいります。それでは困るのです。これからなのです。

ところで皆さんは、大学は学問をするところだ、ということは百も承知しておられます。しかし、その学問とはなにか、ということになりますと、そうやすやすとは答えられないでしょう。なかにはそういうことはもう手垢のついた問題で、いまさらなんだ、という人もおられるでしょう。

大学で学問をするということが、俗にいう「立身出世」と結びつけられて考えられ、またそれが現実的意味をもっていた時代には、この学問の目的は明らかでした。悩むことはなかったのです。つまり、そこでは官僚機構の中に入り、新生日本国家の運営に寄与し、また、「殖産興業」のための科学技術の発達に貢献するといった「明確」な目的のために学問の多くが収斂されていたのです。

第二次世界大戦後の経済復興、なかでも高度経済成長期にその方向性は拡大して継承されてゆきました。

こうした流れの中では、多少の例外はあるにしても、国家運用に関する法的知識と生産力向上に役立つ自然科学系の学問がもてはやされたのです。

今日は、いわゆる情報化時代です。さまざまな情報を可能なかぎり収集し、処理し、明日への展望の礎にするための「コンピューター学問」が花盛りです。

科学技術の発達が人間社会にもたらしたよい面は数え切れません。しかし同時に恐ろしいこともやってのけます。いまや、スピード、能率、合理性、高度の生産性、計算がすべてに優先し、人間精神の内奥まで管理の徹底化が行われようとしています。

こういうものでは計算できないものを宿しているのが人間でありまして、すべて計算可能な人生なんていうものは想像しただけで寒けがしてまいります。

科学技術の発達に寄与する学問があってもいい。あるいはビューロクラシー貫徹のための鋭敏な頭脳養成機関があったっていいでしょう。

しかし、人間が学問をするという本質的意味は、もっともっと深いところにあるといわなければなりません。つまり、何ものかの手段としての学問ということを前面に出すのは、きわめて底の浅い考えだということです。学問は学問のために存在するということの意味の深さを、このあたりで考えるべきだと思います。それは一時批判されました「象牙の塔」にたてこもるといった閉ざされた精神をいうのではありません。学問は学問として自足するということは、大変な覚悟とエネルギーがいることなのです。面白さと苦痛も同居するでしょう。あらゆる嵐から、またあらゆる誘惑から身をまもりながら本当のことを知ろうとするのが学問の本質だと思います。つまり「真理価値」というものだけを頼りにコツコツと思索を続けることなのです。それがたとえ無味乾燥に思える営為であったとしてもです。

あまり性急に学問をすることを他の目的に結びつけることなく、学問することの面白さ、楽しさ、苦しさをまず学びとるようにしていただきたいと思います。

無駄だと思うことをやってみて下さい。